2019年（令和元年）
第144号
（12月1日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　田中規之
編集委員長：渉外広報　植田恭司
〒605-0041　京都市東山区三条東町 230
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

佐藤教会長退任式＆中村教会長就任式　～感謝・報恩・常精進～

2011 年 12 月から、８年間にわたり京都教会長を務めた佐藤益弘教会長が退任することになり、11 月 30 日「退任式及び送る会」を開催し、多くの会員が参加しました。

退任式では、佐藤教会長の指導によって救われた会員代表１名が発表。息子とのふれあいの中で「お互い笑顔になることが菩薩行ですね」と言われた言葉が心に残っていると振り返り、息子を褒めることが出来なかった自分が出来るようになり、家庭の中で笑顔が出るようになったと述べました。

続いて登壇された国会議員のご挨拶では、就任式でも挨拶したことを述懐し「京都の方には気を付けて下さい。建前と本音がある」とアドバイスしたと述べると、会場からは笑いがおこりました。また、「教会長ご在任中に、自然災害が起きた際の避難所に京都教会が指定されたことは、数ある業績の一つであり、今後は庭野会長のお膝元で教団常務理事としてご活躍されること思います」と、期待を寄せられました。

佐藤教会長はあいさつの中で、「就任式でのアドバイスで京都では『考えときます』は断っていることだと教わったお陰で、引っかからずに８年間やってこられました」と述べると会場から笑みがこぼれました。８年間の就任中、６年間は教区長も兼任したことにふれ、「教会を留守がちでも、会員さんが守って頂いた。ただただ御礼申し上げたい」と述べました。

後任の中村教会長は前任でもあることにふれ、湘南教会長時代での中村教会長との出来事を述懐。また、京都教会長の８年間で、中村常務理事に力添え頂いた４つの大きなことを報告し「大恩ばかりだった」と感謝の意を述べました。

京都教会 60 周年という輝かしい年を教会長として務めさせて頂けたこと、11 月の佼成ニュースで全国に「京都教会ここにあり」と広まっていることを踏まえ、「益々、人材育成への取り組みや更なる精進をお祈り申し上げます」と結びました。

2004 年 12 月から 2011 年 12 月まで京都に赴任していた中村常務理事が、この度、京都教会長に就任することになり、12 月８日成道会の日に就任式が行われ、多くの会員が参加しました。

式典は奉献の儀、読経供養に続き、会員代表の歓迎の辞があり、中村教会長の挨拶がありました。中村教会長はご本部での様子を述懐し、今朝は８時から次々に打ち合わせ等行われ、教会がこんなに忙しいペースで動いていたのかと改めて認識したと述べると会場から笑いがこぼれました。

赴任していた当時を振り返り、壮年部の「一日 100 回ありがとう運動」が自行に沁みついていると報告。そのお陰で会長先生のお側で仕えることが出来たと感謝を述べました。また成道会の意義にふれ、お釈迦さまが悟りを開いた後の第一声を紹介し、すべての人は仏と同じ性質を持っていると説明。自分は開祖さまや会長先生とは違い「凡夫」だからという言い逃れをやめ、「法華経に示された人間の生き方を知っていただき、本当の幸せをつかんでもらいたい」という開祖さまの願いに応えてまいりましょうと述べました。最後に、命がある限り、菩薩としての働きを行い、周りに喜んで頂ける自分になること、それが出来る自分だと悟り、自覚する日が成道会ですと結びました。

国会議員は挨拶の中でご本部での中村常務理事は非常に忙しく、立正佼成会の顔だったと振り返り、そのような立場にも関わらず心配りをされ、走り回っておられたとご本部での様子を紹介されました。私たち議員の仲間は京都教会に育てて頂き、今後もこのご縁を大切にしていきたいと述べ、締めくくりました。

時事刻々

令和元年も残りひと月になりました。今年の最大の話題は、なんといってもラグビー・ワールドカップではなかったでしょうか。にわかファンも増えて、日本中が熱狂にわきました▼しかし一方で、不幸な出来事もありました。東日本を襲った台風により、広い範囲で風水害を被り、多くの人が犠牲となりました。一日も早い復旧・復興を祈念いたします▼また、七月に起きた「京都アニメーション放火事件」や十月の「首里城火災」は、国内だけでなく、世界各国にまでショックが広がりました▼毎日のように悲しい事故や事件が報道されています。誰しも日々安穏に暮らせることを望んではいますが、絶対の保証はありません。だから、この世は『無常』だと仏教は教えます▼世の中が変化しても、自分が変わらないから『無常』という言葉に嫌な響きを感じるのではないでしょうか。変化を前向きにとらえて、今月は一年を総決算して、新たな一歩を踏み出していきたいものです。

今月のことば　～弁を尽くす～

総務部長　竹岡千賀

本年は、京都教会にとって節目の年でした。
発足 60 周年を迎え、６月２日には記念式典、10 月 13 日には記念祝賀会を催すことが出来ました。
これもひとえに歴代教会長さん、幹部の皆様、サンガの皆さま、そして外部から支えて下さる皆様のお陰さまと感謝致します。ありがとうございました。

立正佼成会では、12 月は新年のスタートの月として捉えています。発足記念の感謝と共に新たな精進の決意で臨みたいと思います。

さて、佼成 12 月号では会長先生より「弁を尽くす」とご指導頂いています。
前段では「言葉の力」と題して、人間が生まれもって授かった心、すなわち「人」としての素朴な感情や意思を言葉を使ってまわりの人に伝え、コミュニケーションを繰り返すなかで「人間らしい心」が育ってきた、と教えられました。

そして、さらに人とよりよい関係を築くためには、「この人に幸せになってもらいたい」一心で教えを伝えた「富楼那に学ぶ」ことだと後段で教えて下さっています。「人びとの心に喜びを与え」「対話する相手一人ひとりの受け止め方をよく理解し」「大切なことをだれにもわかるように」思いやりをもって言葉を交わすことが大事である、と。

そこで思い出したことがあります。「開祖さまを想う」竹村欣三著の一部です。
「かつて、開祖さまが東京の教会長さん方と東京・椿山荘で御食事をされた後、ある男性の教会長さんが先頭になって２万坪もある回遊式庭園内をご案内することになった。ところがどう間違えたのか行けども玄関のところに出られない。それでもやっとのことで玄関の車寄せに辿り着くことが出来た。このときも開祖さまは恐縮しきりの男性教会長さんに『今日は君のお陰で、ふだん見られないところをいろいろと見させてもらえた。有難う。』とねぎらいの言葉をかけられたという」

何という開祖さまのお優しさ、素晴らしさ。多くを語らずとも瞬時の思いやりの一言が『弁を尽くす』ということなのだと私は感じたのです。

その教会長さんは、どれ程冷や汗をかき、自分を恥じ、責め、生きた心地すらしなかったことでしょう。そして開祖さまのそのお言葉がどれ程有り難く、温かく、心に沁みて救われたことでしょう。私にはとても真似のできることではありません。

しかし、怯まず、その時、その時目の前にいる人に対して、大事に弁を尽くしてふれあいたいと思ったのです。まずは主人ですね。　合掌

七五三式典　～各支部、各家で実施～

京都教会では今年、教会全体で七五三式典を行わず、各支部が中心となり、各家で申し込みをし、実施しました。今回、参加された方に感想を伺いました。

先日、長男７歳、次男５歳を迎えたお礼に家族で七五三詣りをさせて頂きました。
結婚 11 年目で授かった長男は、なかなか体重が増えず、保健センターから何度か泣きながら帰ったことがありました。また泣くわ、寝ないわで、ぐずる子供と一緒になって泣いたこともありました。
ぐずる子供に怒鳴って叱ってしまう自分のことや、子供が生まれても生活のペースが変わらない主人のことなどを家庭教育で教えて頂いたり、少しずつ教会に行って教えて頂いたおかげで、家族で支え合って一緒に成長しながら生活させて頂くことが出来ました。
これから子供たちがいろんな人に出会っていろんな経験をして、たくさんの人にお世話になっていくことを主人と一緒に見守りながら、また自分も主人や家族も含めて、ふれあう人から安心してもらえるような人になれるように、特に主人に感謝が足りず、なかなか下がれない私ですが、相手を思いやれるよう優しくなりたいです。（西京支部　兼田有希子）

西日本普門合唱フェスティバル　～大阪普門館にハーモニーが響き渡る～

11月3日、西日本普門合唱フェスティバルが大阪普門館ホールで行われ、京都教会からも「コールコスモス」が出演し、会員も応援に駆けつけました。

開会式では台風19号による被災された方々への黙祷から始まり、佼成文化協会長の菅野泰正氏は挨拶の中で会長先生のお言葉を引用し、「私たちはみな兄弟姉妹、被災された方々と心を一つにして復興に取り組んでいきたい」と述べました。

合唱は、大阪「聖歌隊」、神戸「RKKシンフォニー神戸」、豊中「法輪コーラス部」、京都「コールコスモス」、滋賀「ハートフルハーモニー湖声with ファミリー」の順に発表し、日頃の練習の成果を披露しました。

コールコスモスが「野口雨情の動物メドレー」を歌いだすと、会場からは手拍子が始まり、その工夫を凝らしたメドレーに大きな拍手が送られました。

最後に、佼成文化協会「佼成合唱団」の合唱があり、参加者全員で「衆会」の大合唱を行い、閉式となりました。

心の眼（まなこ）　吉澤健吉（京都産業大学教授）　～比叡山時報　第777号に掲載された記事より～

立正佼成会京都教会の発足60周年記念祝賀会が先月、京都市内のホテルであり、私も招待され出席した。第1回比叡山宗教サミット以来、天台宗と深いご縁があり、宗教協力を旨とする同会らしく、祝賀会には門川大作京都市長、杉谷義純・妙法院門跡門主をはじめ、天台宗、臨済宗、神社、教派神道など宗教界や政界から多くの人が集い、60周年を祝った。宗教記者時代から30年以上のお付き合いのある不肖、私も請われて挨拶をさせていただいた。

立正佼成会京都教会には、忘れられない思い出がある。京都教会がまだ京都市内南部にある木造瓦葺の建物だった時代である。当時、理事長だった故長沼基之氏に面会を求められた。近く京都の地に新しい京都教会と京都普門館を建設したいが、新聞記者として外部からの意見を聞かせてほしいとのことだった。

温厚なおじいさんという感じの長沼氏は「京都は世界宗教者平和会議(WCRP)の発祥の地であり、伝統仏教の本山が集中している特別な地なので、庭野日敬会長(当時)も格別の思い入れがある」と言われた。

私はせっかく建設するのならと2つの提案をした。一つめは教団だけでなく諸宗教に開かれた施設に。二つめは地域の団体も利用できる開かれた施設にということである。完成してみたら、立派な会議室と体育館を備えた他にない教会になったので驚いたものである。

日中韓仏教友好交流会議日本大会では、各本山の本尊が違うなか「仏教共通の釈迦牟尼をまつっている」との故水谷幸正・佛教大学学長の推薦で会場に選ばれ、故白柳誠一カトリック枢機卿、故広瀬静水・大本総長、山田能裕・WCRP元難民委員長の3氏がWCRP30周年の座談会を行ったり、京都における諸宗教の交流拠点として活用されてきた。

天台宗と同じ法華経を根本聖典とする同会のこと、京都教会が今後も法華一乗の拠点として発展することを願ってやまない。

日常生活の中の仏教用語　～えっ？こんな言葉も仏教が語源？～

言葉のルーツを知って仏教に親しみを持ちましょう。

【道化（どうけ）】

人々に仏の道を説き、教え導くこと、「道法教化（どうほうきょうけ）」からきた言葉。現在の人を笑わせたり楽しませることや、その人を表す意味とはほど遠い。

その起源は、仏教の教化の方法にあった。どんなにありがたい教えでも、むずかしい言葉や真面目なだけの話では、庶民に受け入れてもらえない。そこで、笑いを誘うような話し方や身振り、大道芸などで、わかりやすく、楽しく説法をしていた。

やがて、こっけいなことをしたり、いったりすることを道化るというようになった。道化師といえば、ピエロをすぐに連想するが、本来は仏教を説くお坊さんのことだったのだ。

（「仏教早わかり百科～主婦と生活社～」から抜粋）

庭野日敬開祖　法話集　～開祖随感より～

「すべてお陰さま」

今年も無事に一年を過ごさせていただいて思うのは、「この身に、どれほどのご守護を頂戴してきたことか」という感慨です。「タンポポが一輪咲きました根のお陰です葉のお陰です」という、どなたかの詩の一節があります。とかく私たちは、タンポポの花にだけ気をとられて、その花が、根のお陰、葉のお陰で咲いていることに気づかずにいることが多いのですね。それと同じで、お互いさま、ご主人のお陰、奥さんのお陰、親のお陰、子どものお陰、まわりのみなさんのお陰を、ごくあたりまえのことのように思い、見過ごしてはいないでしょうか。この世の中でいちばん大事なものは、よほど心の眼を見開いていないと見えてこないのです。

百七歳の天寿をまっとうされた清水寺貫主の大西良慶師は、「ありがとう言うて生きることが極楽やの」という言葉を残しておられます。一年の終わりに、もう一度、まわりのお陰さまをかみしめたいものです。

「ご縁をかみしめる」

私は、恩師の新井助信先生との出会いによって法華経に導かれて目を見開かされ、そして妙佼先生という、またとない修行の友に磨かれて、今日の幸せに導いていただきました。それにさらに佼成会というサンガのみなさんに助けていただいて今日を迎えさせていただいているわけです。

その私と同じように、みなさんもまた、さまざまなご縁によって今日があるわけで、その縁のありがたさをもういちど振り返り、かみしめていただきたいと思うのです。 自分をこの世に生みだしてくださった両親、この法に遇いえたその縁をつくってくださった導きの親御さん、そして、どんな人も幸せに導く法をお説きくださった教主釈尊の大恩……考えていくと、自分がどれほどの大恩によって生かされ、支えられ、導かれているか思い知らずにいられません。

ふだん、つい忘れがちな過去をあらためて検証し直して、自分が受けた恩をかみしめる瞑想修行がありますが、一年の終わりを迎えて、一日、じっくりと自分を振り返ってみたいものです。そこから真の自他一体感がわき起こって、さらに新たな精進の決意が湧いてくるのです。

「仏さまのはからい」

今年も無事に年の暮れを迎えさせてもらえましたが、景気の停滞や、天災、病気などで、素直に「無事、この一年を過ごせました」と言えない方もおられるかもしれません。けれども、その苦労の多かった一年を、どう受け取るかが大事だと思うのです。仏さまは私たちのすべてをわが子として、「必ず私が守ってあげます」とお約束くださっています。そのお言葉を、信じきるのです。

この一年、みなさんがどのような苦しみに遭い、どうがんばってきたか、そこから立ち上がるみなさんの懸命な努力を、仏さまはいつも見守ってくださっています。仏さまは、わが子がそれだけの力を具えているのを、信じきっておられるのです。親が子どもを強く育てるために、その願いとは違うように見えるものを与えることがあるように、仏さまは、いま私たちにいちばん必要なものをお与えくださいます。安穏無事とは、なにごとも起こらないことではなく、どんなことが起ころうと、それを乗り越える力を具えていることです。非情の試練とみえることが、その力をつけてくださる仏さまのおはからいだったと分かるときが、必ずきます。　（つづく）

１２～１月の主な教会行事

12月1日(日)	9:00～	朔日参り
4日(水)	9:00～	開祖さまご命日
5日(木)	9:00～	教会発足記念日（60周年記念）
8日(日)	9:00～	成道会
10日(火)	9:00～	脇祖さまご命日
15日(日)	9:00～	釈迦牟尼仏ご命日
22日(日)	9:00～	教会大掃除
1月1日(水)	6:30～	元旦参り
4日(土)	9:00～	開祖さまご命日
7日(火)	9:00～	御親教
10日(金)	9:00～	脇祖さまご命日
15日(水)	9:00～	釈迦牟尼仏ご命日
26日(日)	10:00～	第54回成人式
19日～26日	6:00～	寒中読誦修行

●メッセージ

今年もさまざまな出来事があり一年が過ぎて来ました。その一つに、５月に年号が「令和」になりました。明治以降の憲政史上初めて、かつ、202年ぶりとなる天皇の譲位に伴い改元が行われた時代を共に迎えられました。OA 化、インターネット化が進んでおり、新元号への対応準備の期間が必要であることから、改元の１か月前となる2019年４月１日に「事前公表」されたことも、これまでの改元時とは異なりました。

即位を国内外に宣言される「即位礼正殿の儀」をはじめ、一連の行事は代々の天皇が行われてきたことであり、それらを目の当たりにすることも出来ました。そして陛下が国民を想い「神々」に祈りを捧げられている姿を拝見した時、私は会員さんに対してどれだけの祈りを捧げられていただろうかと内省します。